

特集

北海道の観光と道路

～道に関連する 観光研究の紹介～

北海商科大学大学院
商学研究科ビジネス専攻
教授 大内 東 氏



1. はじめに

古代より道は社会の成熟と共に、また交通手段の進歩と共に発展してきましたが、もとより道の第一義的な目的は人・物の移動を容易にするための基盤であります。

人が移動する理由は、仕事、買物、観光など様々ですが、中でも観光は本質的に人の移動によって成り立つ行動です。

本稿では観光について定義、基本要素、我が国における観光政策の動向についてまとめ、最後に、道に関連する観光研究を2つご紹介いたします。

2. 観 光

観光という言葉は日常生活でもなじみ深い言葉であり、新聞・テレビのニュースでもよく取り上げられています。例えば、

- ・ 平成23年度の訪日外国人来道者数は、56万9,700人であり、前年度比76.8%にとどまった
 - ・ 平成23年度の来道観光入込客数は、4,612万人であり、前年度比90.0%であった
- 等の記事をよく目にします。

実際、観光は21世紀の経済を支えていく基幹産業であると認知されていますが、観光が重要な経済活動として認識されたのはここ10年以内のことであり、それまでは観光と言えば物見遊山で個人の楽しみ程度にしか認識されておらず、日本経済にとって観光産業は二流、三流という位置付けであったかと思われます。

観光産業は、旅行業、交通産業、宿泊業等幅広い分野を包含しており、極めて裾野の広い産業です。

また、その消費額や雇用規模からみて、その経済効果は極めて大きく、平成20年度での二次的な経済波及効果を含む生産効果は、国内生産額972.0兆円の5.3%の51.4兆円、雇用効果は総雇用6,445万人の6.7%の430万人と推

計されています^[1]。

まさに観光産業は国内産業の空洞化が進む我が国において、新しい雇用を創出する産業として期待されているのです。

2.1 観光の定義

観光の定義を明文化して整理しているものとしては、平成7年6月に出された観光政策審議会の答申「今後の観光政策の基本的な方向について」(答申第39号、平成7年6月2日)があります。その前文において観光を「余暇時間の中で、日常生活圏を離れて行う様々な活動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とするもの」と定義しています。

また、世界的には世界観光機関(The World Tourism Organization(UNWTO))には以下のtourismの定義があります。^{*1}

The World Tourism Organization(UNWTO)
Tourism is defined as the activities of persons traveling to and staying in places outside their usual environment for not more than one consecutive year for leisure, business and other purposes not related to the exercise of an activity remunerated from within the place visited.

これらの2つの定義の共通点は、いずれも観光を空間、時間、目的の観点から定義しており、それぞれ以下の内容となっています。

空間：非日常生活圏

時間：おおそ1年以内

目的：レジャー、ビジネス、学び

すなわち、観光とはいつもの生活圏から離れた場所へ移動し、1年以内の滞在において行うレジャーやビジネスとなります。

ビジネスや学びが観光というのは通常感覚からすると

なじまないかもしれません。

しかし、観光を人の移動とそれに伴うビジネスあるいは産業として考えるならば、この広義の定義は妥当ではないでしょうか。

※1世界観光機関は観光分野における国際協力の促進を目的とする国連専門機関である。1975年にWTO(The World Tourism Organization)として設立された。2003年12月に国際連合の専門機関となった。2005年に世界貿易機関(World Trade Organization WTO)との混同を避けるため略称に「UN」を付けたが、正式名称はWorld Tourism Organization のままで、本部はスペインの首都マドリッドにある。なお、海外では観光はsight seeingではなくtourismが一般的である。

2.2 観光の基本要素

上の観光の定義をもう少し具体化してみます。観光の基本要素は俗に

場(ば)+[顎(あご)、足(あし)、枕(まくら)]と言われる4つの基本要素から構成されます。場は地域であり、狭義の観光地あるいは広義の非日常生活圏であり、観光を形成する上で基盤となる空間です。

顎とは食であり、観光における重要な要素です。旅先でその土地の食を味わうことは大きな動機になり、食そのものを目指すグルメツアーも盛んであります。

足とは交通であり、観光地までの移動手段であり、航空機、電車や車などの陸上交通機関、船舶の海上交通などです。

枕とはホテル、旅館、民宿など宿泊です。

観光を成立させるためにはこれらの要素を確定する必要があります。

観光を顧客と企業の観点から見ると、顧客は観光の主体である旅行者であり、企業は旅行者に顎・足・枕のサービスを提供するサービス提供事業者となり、観光産業はこれらのサービス提供事業全体を指す言葉となります。※2

※2我が国の産業分類には観光産業という分類は存在しない。上の意味において観光産業を定義すると、ほとんどすべての産業を網羅するであろう。

3. 我が国における観光政策の動向

観光に関する基本的な法律としては、昭和38年に成立した観光基本法が最初です。

当時は東京オリンピックを控えて外貨獲得、施設整備などを見込み、議員立法という形で制定されましたが、その影響は一部にとどまっていました。

我が国において観光が経済活性の基幹産業として注目されるようになったのは、2003年(平成15年)のビジット・ジャパン・キャンペーンからと考えられます。ここにおいて、「2010

年(平成22年)に訪日外国人旅行者数を倍増の1,000万人へ」との方針を発表しました。

その後、政府は、2006年12月に「観光立国推進基本法」を制定し、観光立国の推進を21世紀における我が国の重要な政策の柱として位置づけました^[2]。

これを受けて、2007年6月に「観光立国推進基本計画」が策定^[3]、また同年10月1日には「観光立国」の推進体制を強化するため国土交通省の外局として、新たに観光庁が設置されるなど、2007年は我が国の現代観光にとってエポックとなる年となりました。

基本計画の特徴は、4つの基本方針、「国際競争力の高い魅力ある観光地の形成」、「観光産業の国際競争力の強化及び観光の振興に寄与する人材の育成」、「国際観光の振興」、「観光旅行の促進ための環境の整備」のもとに、2012年を目途に、5つの具体的な数値目標を設定したことにあります。

数値目標は3年後の2010年に見直しが行われ^[4]、新たな「観光立国推進基本計画」が平成24年3月に閣議決定されました^{[5][6]}。

今後5年間の方向として、「観光の裾野の拡大」と「観光の質の向上」を掲げ、2016年を目途に見直した数値目標が設定されています(表1)。

表1 H22年数値目標と実績及びH28年見直し目標

	基準数値 (基準年)	H22年 目標	実績 (H22年)	H28年 目標
訪日外国人 旅行者数	733.4万人 (H18年)	1,000万人	861万人	1,800万人
邦人海外 旅行者数	1753.5万人 (H18年)	2,000万人	1,664万人	2,000万人
国内における 観光旅行消費額	24.4兆円 (H17年)	30兆円	23.8兆円	30兆円
邦人国内旅行に おける宿泊数	2.72泊 (H18年)	4泊	2.12泊	年間2.5泊
国際会議 開催回数	168回 (H17年)	252回	741回	1,111回以上

4. 観光人材育成

上述の基本方針にあるように、基本計画は観光人材育成についても触れています。

「観光産業の高度化を図るため、観光関係学会等の活動の充実を奨励するとともに、高等教育段階において観光の振興に寄与する人材の育成を促進する。」2005年に国立大学として最初の観光関連学科が山口大学と琉球大学に設立されたのに始まり、他大学でも観光関連学科が設置され、2006年に3,000人であった大学観光関連学科定員は、2009年には4,402人(39大学43学科等)となりました^[7]。

また、学術団体として、観光にITを活用する観光情報学会が設立されました^[8]。

5.道に関連する観光研究

最後に、著者が行った観光研究から、道に関連する研究について2つ紹介します。1つは道そのものに関するものであり、もうひとつは道を抽象的象徴としたものです。

研究事例1：GPSを用いた観光動態調査

【研究の背景と目的】

近年の旅行形態のシフトに伴い、現在、北海道へ観光に訪れる観光客の6割近くはレンタカーを利用した個人旅行です。

しかし、各個人のレンタカーを用いた観光行動の詳細な調査と、その結果の戦略的な活用はほとんど行われていません。

観光ルートの整備、各地の行政の観光政策提携、観光スポット開発などを効果的に行うためには、綿密な調査データに基づき戦略をたて、限られた資源を有効に活用する必要があります。

そこで本研究では、GPSを活用することで観光客に負荷をかけることなく詳細な動態データを取り、アンケートによって観光消費行動などのデータも収集するGPSログマイニング法とその実証システムを開発し、実際にデータ収集と分析を行いました^[9]。

【研究手法】

システム開発において主要な問題点は精度にあります。GPSの単独測位においては電離層、大気の影響、マルチパスの影響により測位誤差が生じます。

また、GPS受信機の状態による記録エラー、遮蔽物による測位不能などを回避できない問題があります。

そこで、これらの影響を極力小さくし、GPSログデータのみから正確に個人行動情報を抽出するGPSログマイニング法の開発を行いました。

図1に開発したシステムの処理フロー、図2に本研究において使用したGPSログ収集装置を示します。

本GPSログ収集装置は、Germin社製ハンディGPSレシーバーeTrex Legendをベースとし、電源供給部に改良を施しました(縦15cm×横21cm×高さ10cm)。

本装置は電池駆動式であり、最大で約1週間の連続動作が可能です。また、1万個のログをメモリに保存することができ、ログ記録間隔は1秒単位で任意に設定することが可能です。

保存されたログはRS232Cインターフェースを通してPCに転送します。

本システムの検証実験は、株式会社トヨタレンタリース札幌の協力により実施しました。

トヨタレンタリース札幌新千歳空港ポプラ店において平

成16年4月から6月までの2ヶ月間、被験者の募集を実施し、GPSログデータの収集を行いました。

被験者のレンタカーにはGPSログ収集装置を設置し、制限や制約を課すことなく自由に観光を実施してもらいました。

ログの記録は1分間隔とし、被験者には事前に調査票を渡し、観光中にレンタカーを停車した時点で随時、観光地、観光内容、到着時間を記入するアンケート調査も併せて実施しました。

これにより、52件のGPSログデータが収集されました。

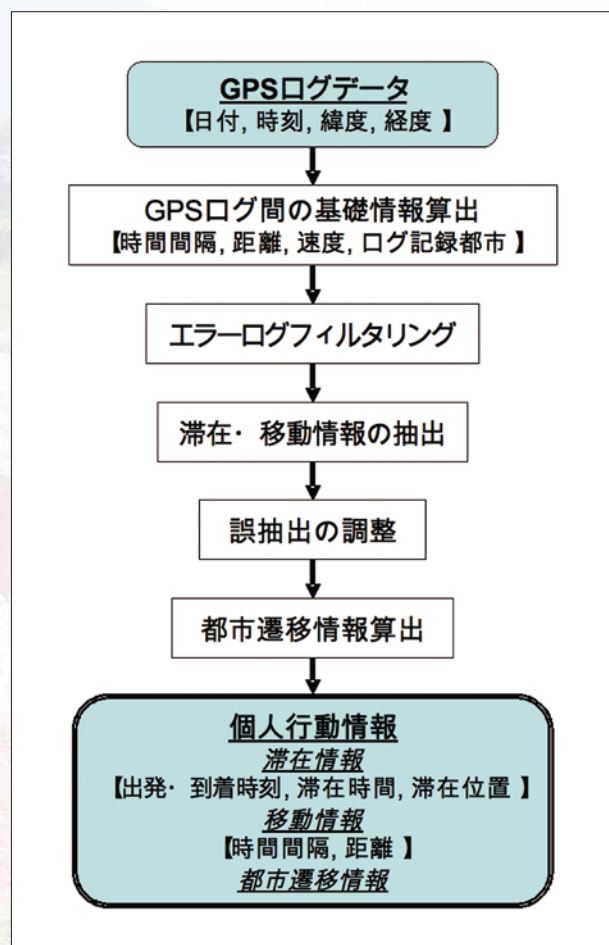


図1 全体の処理フロー



図2 GPSログ収集装置

【研究結果(概要)】

図3がGPSにより取得したデータの一例です。濃い色で示された線が実際にレンタカーによって移動したルートを示しています。

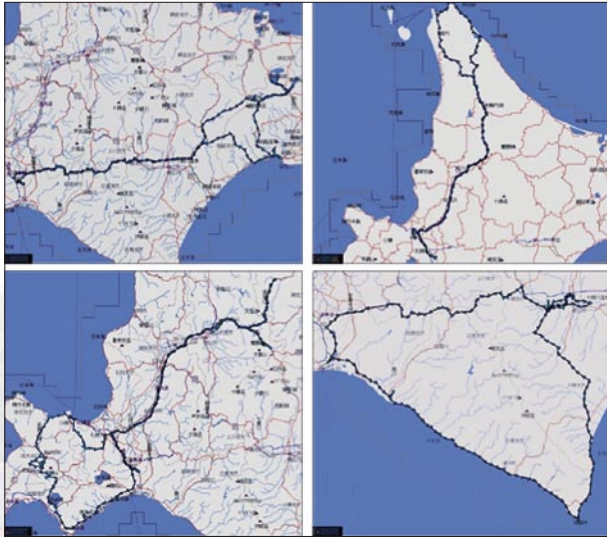


図3 収集されたGPSログデータ例

本システムでは、各旅行者の個人行動情報だけでなく、これらに基づく統計情報も得ることができます。

表2に得られた統計情報の例を示します。例えば、1移動における距離は約30kmであり、一日あたりの訪問都市数は9都市であるのに対して、滞在が行われる都市数は3都市と少ないことがわかります。

滞在が行われない都市において魅力的な情報発信を行うことで、旅行者を留めることができる可能性があります。また、滞在が多く行われる都市間の連携を強化することによっても、観光の促進を図れるものと考えられます。

表2 統計情報

項目	平均
旅行日数	2.9日間
行程全体での滞在地数	15.1箇所
1滞在地における滞在時間	167.4分
宿泊を除く1滞在地における滞在時間	47.9分
行程全体での移動距離	464.5 km
行程全体での移動時間	622.9分
1移動における距離	29.9 km
1移動における時間	40.1分
訪問都市数(重複なし)	18.1都市
一日あたりの訪問都市数(重複なし)	8.7都市
一日あたりの滞在都市数(重複なし)	3.3都市

更に、本システムの分析ツールの1つを利用して、都市遷移情報の可視化することもできます。

図4は50サンプルを統計処理した結果です。丸い点は北海道内の市町村に対応し、特に赤丸は観光客がその市町村に停車したことを表しています。また、線は観光客の都市間の移動を示しており、線が太いほど通過した車が多いことを表しています。

現在ではより安価で精度の高いGPSが容易に入手できますので、このような分析を行うことで、更に有効な観光動態情報が得られ、効果的な観光戦略及び施策の構築に寄与できると考えられます。

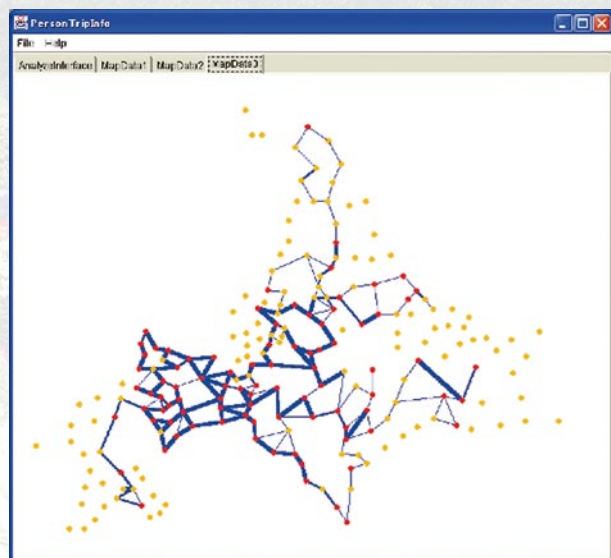


図4 都市遷移情報の可視化結果

研究事例2：R12背骨プロジェクト

【研究の背景と目的】

今回ご紹介するもうひとつの研究事例は札幌、旭川間の道央地域の経済活性を目指し、国道12号線をネーミングに使用しましたプロジェクトです^{[10][11]}。

国道12号線(root12)は札幌と旭川を結ぶ国道ですが、道央高速道、JR石北線と並行しており、R12を国道12号線のみならず、これらの交通ラインの総称とし、石狩、空地、上川の3つの地域を縦断するこれら地域のバックボーン(背骨)と考え、「R12を背骨と見放し、これに関与する地域が一つとなり、『ひと・もの・かね』の活用によって地域全体の経済発展を目指すプロジェクト」をR12背骨プロジェクトと命名しました。

本プロジェクトは2009年より開始して、2015年を最終年度として計画し、現在も進行中です。本稿ではこれまでの活動とその内容によって得られた成果と知見について報告します(図5)。

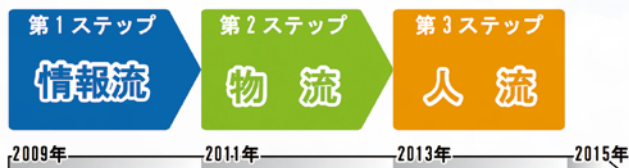


図5 プロジェクト実施計画

【研究手法】

近年、観光形態は以下のように変化しています。

＜団体旅行、発地型商品、売れ筋商品＞

⇒＜個人旅行、着地型商品、ニッチ商品＞

この変化に合わせて次の2つの特色ある方法論を展開します。

①地域連携

R12沿線地域において、一地域だけの資源では脆弱となります。しかし、沿線地域が連携をとりゾーンとして情報を発信することにより、地域の経済を上向かせることが可能と思われます。

②地域再生のイノベーション

イノベーションとは「改革」あるいは「変革」を意味します。

イノベーションを起こす方法論は従来の延長にない方法（視点、やり方、ひと）が必要とされます。

R12プロジェクトでは、イノベーションを起こす方法論として、マルチエージェント・システムの概念に基づき、以下の3点からプロジェクトを推進しています。

{ 視点:ゾーン連携 }
 { やり方:民主導 }
 { ひと:三もの }

地域活性化には「わかもの、あつもの、よそもの」の三もの存在が必要であり、三ものは必ず存在すると言われてい

ます。すなわち、R12の各地の三ものをコアとするエージェントを構成し、このエージェントの相互作用によりプロジェクトを進める構想です。

【研究結果(概要)】

2009年以来、実施してきた主な活動です。

(1)タウンミーティング 開催(2009年～2011年)

R12沿線地域「コアメンバー」による会議であり、開催地のコアメンバーがホストとなりその地域の特色ある観光資源や活動の紹介を行います。

参加者はR12コアメンバーの他、当該地域の行政担当者、関心を持つ事業者などで、内容の濃い議論が起きました。

2009年第1回(岩見沢市)から始まり、2011年第9回(深川市)まで計9回のミーティングが実施されました。

(2)シンポジウムの開催(2010年度、2011年度)

その年の活動の総まとめとして、シンポジウムを開催しています。これまで2回の開催を実施しました。

■第1回シンポジウム:2010年3月13日(土)、砂川市地域交流センター

■第2回シンポジウム:2012年5月12日(土)、旭川市ときわ市民ホール

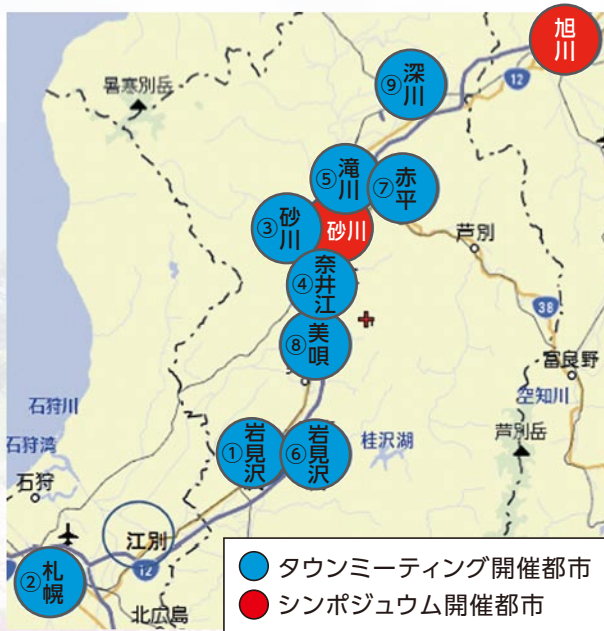


図6 タウンミーティングとシンポジウムの開催

(3)R12沿線観光資源データベースの構築(2009年)

R12沿線地域にある観光資源を調査し、観光資源データベースを作成しました。

2010年に北海道旅行業協同組合のフォーマットに合わせて札幌市から旭川市までの主要地域の観光資源をデータベース化しました(図7)。

素材記入用紙			
	フリガナ	アルデビアツァ	
	素材名	アルデビアツァ	
	種類	施設	
	カテゴリー	公園	
	説明	のどかな自然が四季に渡る山麓に位置する「アルデビアツァ」は、廃校になった旧築小中学校の再建により開設された芸術施設。彫刻公園です。イタリア館で芸術広場を意味するは7万平方メートルの広さを有し、地元出身の彫刻家・安田約40点を常設展示しています。木立が緑の芝生広場には、緑が鮮やかな芝生広場や幼稚園となった木造校舎、かつて炭鉱の炭住所として栄えた地域の平家の歴史があります。ステュディオでは、ここを舞台に毎月行っ	
料金		無料	
住所		〒072-0831 北海道美幌市美幌町栄町	
TEL		0128-63-3137	
エリア	美幌市	アドレス	
営業時間	水曜日～月曜日 午前9時～午後5時	アクセス	
休業日	火曜日、祝日の翌日(日曜日は除く)、12月31日～1月1日	URL	
登録日	2009/12/7	食事	
登録者	森 美江	滞在時間	

図7 R12観光資源データベース

(4)旅行商品企画の提案(2010年、2011年)

R12沿線を対象にモデルツアーを計画し、旅行業者と共同でツアーを実施しました。

アンケート調査を行い、ツアーに要求される要件を調査

し、第8回美唄タウンミーティングの結果を踏まえ、道新ぶんぶんクラブと提携し、モデルコースの作成と体験ツアーを実施しました(図8)。

■第1回ツアー:美唄B級グルメ2010年6月26日実施、参加者数45名。

■第2回ツアー:美唄B級グルメ2011年9月14日、21日、22日の3日間実施、総参加者数100名。



図8 プンブンクラブとの協働モデルツアー

(5) 公共WiFiの導入

第6回岩見沢タウンミーティングにおいて提案のあった公共WiFiを利用することの必要性に基づき、旭川市のメンバーが市に働きかけて公共WiFiの導入を実施しました。

これまでの3年間の活動により、R12沿線の主要な地域でのタウンミーティングは一通り終了しました。

東日本大震災で激減した北海道への入込客数も回復しつつありますが、今後の展開は、当該地域の参加者が他人任せにせず、自らが意欲をもって実行する熱意が鍵となります。

6. おわりに

移動が本質的である観光は道と密接な関係にあるのは自然です。

観光のための道の計画と整備、逆に道を有効利用した観光など双方向での取り組みが考えられ、最近では道の駅や北海道の道100選など道そのものを観光の場とする試みもあります。

しかしながら、場は観光の一要素であり、顎・足・枕の要素と一体になってこそ観光は成立します。

「場+顎・足・枕」として今後の取り組みが必要と考えます。

本稿では多岐にわたる観光の話題について述べましたが、道路事業に携わる方々の観光に対する理解の一助になれば幸いです。

謝 辞

交通計画と物流に関して日頃より多くの啓示を頂く本学の佐藤馨一教授、R12背骨プロジェクトを推進する強力な仲間である代表の古川正志教授、プロジェクトリーダーの松浦淳一氏に感謝します。

参考文献

- [1] 我が国における旅行消費額について(平成20年4月～平成21年3月)観光庁
http://www.mlit.go.jp/kankochu/news02_000038.html
同上別紙「旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究」の概要について～平成20年度 我が国における旅行消費の経済波及効果～
<http://www.mlit.go.jp/common/000055367.pdf>
- [2] 観光立国推進基本法(平成十八年十二月二十日法律第百十七号)
<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H18/H18HO117.html>
- [3] 観光立国推進基本計画(平成19年6月)
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kanko2/kettei/070629/keikaku.pdf>
- [4] 観光立国推進基本計画の見直し - 国土交通省
<http://www.mlit.go.jp/common/000129137.pdf>
- [5] 観光立国推進基本計画(平成24年3月30日閣議決定)
<http://www.mlit.go.jp/common/000208713.pdf>
- [6] 観光立国推進基本計画について ～観光でつくる日本のチカラと地域の魅力～
http://www.mlit.go.jp/kankochu/news01_000139.html
- [7] 官公庁資料
<http://www.mlit.go.jp/common/000059997.pdf>
- [8] 観光情報学会HP
<http://www.sti-jpn.org/>
- [9] 長尾光悦、川村秀憲、山本雅人、大内 東
“GPSログマイニングに基づく観光動態情報の獲得”
観光情報学会誌、第1巻、第1号、pp.38-46(2006)
- [10] 大内他、R12背骨プロジェクト(3)～地域観光振興の実践～、第9回観光情報学会全国大会(盛岡)(2012)
- [11] R12背骨プロジェクトHP
<http://s123.do-johodai.ac.jp/seminar/?cat=26>

大内 東 教授 プロフィール

北海道大学工学部卒業、同大学院工学研究科電気工学専攻博士課程修了。1989年より北海道大学大学院情報科学研究科教授を務められ、2009年北海道大学を退官(同名誉教授)。同年北海道商科大学商学部教授、2011年より現職。

現在の先生の研究テーマは情報工学を活用した地域社会の発展として、アジア観光圏における北海道観光産業、地域医療システム、災害復旧のインテリジェンス等多岐にわたります。

特に観光学については、先生自ら「観光情報学会」を立ち上げ、学問的な研究のみならず、基調レポートでもありましたように北海道各地の観光資源をビジネスとして成り立つための研究・活動を幅広く行っております。